

小説同人誌評 27

今回は 『イグネア』！

細見和之

先日、職場の理系の先生と、そもそもウイルスは生物か非生物か、という話をした。ウイルスは自己複製ができず、新陳代謝も行わず、ひたすら他の生物に寄生して増殖を果すからだ。そこからパソコンのウイルスの問題に話は移ってゆき、パソコンのウイルスもまさしくそうだ、ということになった。自身では増殖できず、とにかくパソコンからパソコンへとつぎつぎと移動して増殖してゆく。一台のパソコンの内部に留まっている限りパソコンのウイルスも増えないのだ。

しかし、その話の流れでゆくと、言語もまたそうではないか。日本語なら日本語は、当然それ自体としては自己複製も新陳代謝も行うことができな。日本語は日本語話者たち、日本語の使い手たちの頭のなかでだけ「生きてる」のだ。もちろん、それぞれの話者は違う内容を話したり書いたりしているのだが、日本語の文法はそれによって自己複製を遂げ、

語彙の新陳代謝もゆつくりと進展してゆく。

しかしこう考えると、言語だけではなく、音楽、絵画、料理、イデオロギー、政治システム、宗教等々、およそ文化一般はきわめてウイルス的ではないかと思えてくる。もとより、文化的ウイルスの多くは感染拡大してありがたいもので、それらと今回のコロナウイルスのようになんとか感染を食いとめるべきものとは、大きく意味合いが異なる。しかし、構造というか関係というか、それはかなり本質的に類似しているのではないかと思えてくるのだ。

もちろん、「文学」はそういうウイルス的なものの最たるもので、同人誌はその代表的な感染源と呼べるかもしれない。私たちはコロナウイルスの感染をできるだけ回避しつつ、文学ウイルスの増殖を促している、というわけだ。本稿のような同人誌評はウイルス感染観測日誌でもあるだろうか。

さて、今回読んだなかで雑誌としていちばん充実した印象を受けたのは「イグネア」第9号だった。多くの同人誌よりひとまわり小さな四六判だが、編集後記までふくめて二九三ページの一冊に、力作がぎつしりと並んでいる。

まずは、同誌の巻頭に掲載されている齋藤葉子「花が」。

ある朝の出勤前、「わたし」のマンションの

玄関に花が落ちていた。何気なくその花を自室に持ち込み水を入れたグラスに挿すと、翌朝も同様に玄関に花が落ちていた。そういうことが連続して、偶然花が落ちていたのではなく誰かが意図的に置いているのではと「わたし」は疑う。部屋中が花で溢れかえるころには「わたし」は精神的に追い詰められてゆく。玄関に監視装置まで据えつけてチェックしてみるのだが、それでも花はいつの間にか玄関前に置かれていた…。まるで緊迫感に満ちたミステリー映画のような展開。

続いて掲載されている田中星二郎「行方」。広島市の百貨店に勤務している「僕」は、四十六歳。陶芸作家である妻、岬との二人暮らし。鳥取県に老々介護に近い状態の両親がいて、週に一度はスカイプでやり取りしている。しかし、思わぬことに「僕」は職場でリストラの対象とされるとともに、ちょうどその時期に、高校野球部のはじめての同窓会の案内がフェイスブックで届く。

その同窓会に出席して、自分が唯一誇りにし支えとしてきた試合のことを、誰ひとり覚えていないことを「僕」は知る。「僕」はずつと控えの投手だったのだが、正規の大会の終了後、監督が他校との練習試合を組んでくれて、「僕」は先発の務めをみごと果たしたのだ。その試合のことを監督すら覚えていない。果たしてあの試合は本当にあったのか…。

スカイプやフェイスブックで繋がっている人間関係が当たり前になる一方で、肝心要の記憶はあやふや。そんななか妻の岬は、地に足の着いた生き方をしていて、危うい海を彷徨っている「僕」にとつて、その名のとおりかけがえのない「岬」、あるいは灯台のような存在なのだ。タイトルの「行方」もそういうことと関わっているのだろう。

同誌に掲載されている岩代明子「長谷川書店で会いましょう」は、最後に紹介している宇江敏勝の作品を別格として、他誌をふくめて今回読んだなかでいちばんの名作。

「長谷川書店」というのは、作者の暮らす町の最寄り駅の前に実在する本屋さんだという。その長谷川書店を舞台にした五つの掌篇が、奥行き深く綴られてゆく。いずれも、その書店を待ち合わせ場所にしたさまざまな年齢と境遇の人物が現われるとともに、印象的な一冊の本が物語の軸に置かれている。村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』、「すばいん」と野菜が飛び出る仕掛けの絵本「やさいさん」、尾崎翠の『第七官界彷徨』…。

そして、五つの物語の前後には、それぞれ「章前」「章後」と題して、作者が子どものころから親しんでいた生家近くの「坂の下の本屋」のこと、長谷川書店との出会いと店主との交流が記されている。この実在の書店の話とフィクションである物語の関係も絶妙と

しか言いようがない。書籍のネット購入では体験できないリアル書店の貴重さを読み手に強く届けてくれる作品世界だ。

最後に、同誌掲載の松林杏「二重奏」は、前号に掲載されていた、音楽の専門高校を舞台にした、木下真弓と山崎優歌の物語「チューニング」の後日譚、というよりも続篇。四百字詰め換算で一七五枚にわたるのだ。ただし、前作では真弓の視点で描かれていたのが、こちらでは優歌の視点で描かれている。

三年生最後の定期演奏会で弾く、リムスキー＝コルサコフの交響曲『シエラザード』のヴァイオリンソロのパートをめぐって、前作では幼馴染みの真弓と優歌の確執が描かれていた。部員の投票の結果、優歌に決定するが、演奏会を目前に控え優歌は手の痛みを訴え、結局真弓が弾くことになったのだ。今回の続編では、投票で優歌が僅差で選ばれたのは真弓に反発していた部員の根回しによっていたこと、優歌の手の痛みはプレッシャーからの嘘であったことが明かされる。

今回の後半で二人は、作曲を専攻している同級生、亜沙から、卒業作品として彼女が作曲したヴァイオリン二重奏曲の演奏を依頼される。それは、真弓と優歌を演奏者として想定した、ファーストヴァイオリン、セカンドヴァイオリンという区別を持たない、異なったリズムとメロディからなる二重奏曲なのだ

った。受験勉強を控える身で二人は懸命にその難曲に取り組む…。

相変わらず、音楽を言葉にするといいやっかないな課題を作者はみごとに果たしている。今回の続編においてはとりあえずハッピーエンドの結びだが、読者としては真弓と優歌のその後の人生にまで思いを馳せてしまおう。

『飢餓祭』第46集にも力作が並んでいる。巻頭に掲載されている、島雄「石を投げる」は、東京の小さなオーケストラを「石もて追はるることく」退団に追いやられたチェリストが故郷に戻って一矢報いる物語。

榎田賢次は東京の室内オーケストラでチェロを弾く、六十歳を過ぎた古株。新たに指揮者となった若い永井と対立したことから、辞表を提出せざるをえなくなる。しかも、どうやらそれは、永井をはじめ団員の何人かが仕組んだ罠にまんまと嵌った結果らしい。

生家のある淡路島にもどった榎田は、しばらく兄のもとで居候状態になるが、兄が経営をまかされて自宅でチェロ教室を開くと、小むる。やがて自宅でチェロ演奏を始める。やがて自校五年の高見結衣（ゆい）が生徒となる。初心者の結衣を榎田は心をこめて指導し、結衣はチェロの腕前をぐんぐんあげる。中学一年になった結衣はチェロの全国コンクールに出場する。しかし、その審査委員長があの永井であることが判明する…。

この作品も、先に紹介した松林杏「二重奏」と同様に、音楽を言葉でどう表現するかという難題を果たしている。作者の技量の奥行をあらためて感じた。

同誌掲載の、小網春美「しずり雪」は一風変わった「家族」の姿を描いている。

「私」(七尾朱里)は、六十四歳で亡くなった立花を金沢で看取ったところ。「私」は三十八歳で立花とは親子ほどに離れているが、立花の死に際しては形式的に夫婦の形。さらに「私」には、離婚した二人の前夫のあいだに、それぞれひとりずつ息子がいる。

「私」は独身の立花が社長を務める小さな旅行会社で働いていた。立花は「私」の能力を高く評価し、「私」もそれに応えてゆく。「私」は立花と個人的に食事をする間柄にまでなる。しかし、インターネットの普及と航空会社の大手優先の方針によって、立花の会社は傾き、大手に会社ごと買い取られることになる。立花が社長を退くとき、「私」も保健会社に転職する。

しばらくして、立花は自分が末期癌に罹っていることを「私」に打ち明ける。最後は七尾(私)と結婚して故郷の金沢で暮らしたい、それが立花の願いだっただけ。「私」は結婚にはためらいを感じるが、立花の「死に水を取らねばならぬ」という決意を固める……。

立花という人物の背景がもう少し書き込ま

れていれば、という思いは残る。作品からは、癌末期の宣告を受けるまで自身を貫いていた、有能な中小企業の元社長という以上に読者の想像がおよばないのだ。タイトルの「しずり雪」、枝に積もった状態からあるとき枝が跳ね上がることで落ちる雪というイメージに、その手がかりがあるのだろうか。

さらに同誌掲載の、石塚明子「観音様の旦那」は、森永ヒ素ミルク事件を、生まれた娘にヒ素ミルクを飲ませてしまった母親の視点で描いた好短篇。

私も幼いころ母からよく聞かされた出来事だが、当時は母乳よりもよいと医者も多くも粉ミルクを勧めたのだ。そこにヒ素が混入していた。会社がいちばん悪いのは明らかだが、飲ませてしまった自分を責め続ける母親の心持がなんとも切ない。同時に、岡山県東部に設定されている漁師町の方言がここでは生きている。

「カム」第18号では、宮城芳典「空き家倶楽部」を印象深く読んだ。

主人公の竹村貴司はビルの管理会社に勤務している。妻の母が亡くなって、義父のもとに引越して四年、共働きの妻と幼い子どもがいる。義父との仲は悪くないのだが、入り婿状態で町内付き合いいもこなしつつ、多少気が詰まりも感じている。職場では新しい課長から煙たがられ、営業からカスタマーサービス

への異動を勧められている。

そんななか、いつも一緒に通勤している松山が近所の空き家を勝手に使っていることを知る。松山は社交ダンスの練習場としてそこを利用しているのだ。竹村も一室を借りて、読書したり居眠りしたりするようになるが、やがて松山は「空き家倶楽部之会則」なるものを竹村に提示する。さらに松山は、天井を打ち破って夜に星空を見えるようにしよう」と提案する……。

居場所のない中年男が町内のご真ん中に隠れ家を持つという設定には、興味深いものがある。しかし、末尾でその空き家が取り壊されるにいたるまでがあまりにあっ気ないし、松山に空き家を練習場にすることを勧めた石清水という怪しげな人物も素性が分からないままである。そのあたり、もうすこし展開に膨らみがほしい印象を持ちました。

『せる』第114号掲載の、津木林洋「ミュージズよ」は、四百字詰め換算三〇〇枚近くに達する大作だが、ひと息に読ませる。

中学校二年の小野寺翔太はネット上でファンタジーやSFを書いている。翔太は、著名な賞を受賞している作家、静原麻里の物語を作るワークシヨップで、小説を提出することになる。その作品を静原は激賞する。じつは、翔太は小説家として名の知られた小野寺龍造の孫。おまけに、静原は龍造の大ファンで、

翔太は静原を龍造に出会わせる手筈を整えることにもなる。祖父の文才を受け継ぐ孫という誼い文句で、翔太の文壇デビューが着実に進んでゆく。合わせて、龍造の『自虐力』という新たなエッセイ集も出版される。新聞の新刊広告には二冊の出版が大々的に宣伝される。

物語の後半では、龍造の現在の秘書で若い美貌の女性、千秋の文壇デビューをめぐる騒動が展開してゆく。千秋は『ヘイトスピーチなんかぶっ飛ばせ』という女子大生のブログとインタビュに基づく本に感銘を受け、それを小説仕立てにして大きな賞を受けるのだが、それが「盗作」という嫌疑にさらされるのである。

文壇、マスコミ、出版社の裏事情がたつぷりと組み込まれているうえ、十七節からなるこの作品では、視点人物が節ごと交替してゆく。第一節は翔太、第二節は龍造、第三節は千秋といった具合である。最後の第十七節では、死につつある龍造の意識が、平仮名を多用した文体で、優れた散文詩のようにして記述されている。

このようにこの作品は、これまでの文学的技法を駆使した、文学と文学賞をめぐる息もつかせないエンターテイメントに仕上がっているのだが、読み終えて、作者自身の位置はいついどこにあるのか、という問いは残る。

翔太、龍造、静原、千秋、みんな、若干の軽率さ、場合によっては致命的な軽率さを抱えているとはいえ、ものを書くころごしにそれ自体においては真摯である。しかし、文学賞、出版社、マスコミという絡みのなかでは、すべてがドタバタ喜劇の様相を呈してしまう。それぞれの作品それ自体には救われるべき価値があるはずだ、と主張してみても、この作品世界ではいささか古風な態度に映ってしまうことだろう。つまり、なにかもがパロディであることを免れないような作品世界なのだ。果たしてそれでいいのだろうか。

『別冊關學文藝』第60号掲載の、浅田厚美「百年の咳」は、いわばカルタ（百人一首）づくしの好短篇。

「私」は老人ホームで入居者の「満壽（ます）さん」から彼女の生涯を記憶に残してほしいと依頼される。「私」はボランティアとしてホームで百人一首のカルタ読みをしていて、満壽さんいわば見初められたのだ。当時満壽さんは百一歳、地元の大地主の家柄で典型的な女傑である。その生涯を聴き取ることが「私」の仕事となる。

「私」は小学校以来カルタに親しみ、百人一首をすべて覚えて覚えている。満壽さんも無類のカルタ通で、百人一首をすべて暗記していることはもとより、各人の十八番（おはこ）の札から、相手の性格まで分かるという。そんな

なわけで、百人一首にそくすような形で満壽さんの生涯が「私」に語られてゆく。

満壽さんの人生の要に位置していたのは、息子の浩一郎だった。子どもを授かることができなかつた満壽さんは、地元の貧しい家庭の末っ子だった浩一を養子とし「浩一郎」と新たに名づけたのだった。その満壽さんの物語に、「私」が小学生のときのカルタクラブの記憶が重ねられてゆく。カルタクラブの先生「私」そして「私」より優れた能力を有していたミカコをめぐる三角関係、そこにミカコの母までくわわった、もつれた人間模様……

最後には、満壽さんがじつは浩一郎とのあいだにできた子どもを出産し、そのことを「私」にひた隠しにしている、自分の十八番（おはこ）を明かすこともなかったのではなか、という疑念に「私」はたどり着く。

百人一首のひとつひとつが小さなメモリーチップにも似て、実は膨大な記憶装置なのではないかと、あらためて思い知らされる。

『淡路島文学』第16号では、巻頭の藤井美由紀「鳩の飛翔」に惹かれた。大学生になるまで息子を育てあげてきた女性の一代記。

冒頭、主人公の鈴江が小さな鉄板焼き屋を切り盛りしているところからはじまる。客との少々荒っぽい会話のなかから、彼女のそれまでの苦しい生涯が語られてゆく。彼女は医師と見合い結婚したのだが、その夫からいま

で言う苛酷なモラハラ、モラルハラスメントを受け続けていたのである。そこから彼女は鬱病とパニック障害を併発することになる。疲弊ききった彼女は、女性相談所に駆け込んだ。なんとか調停離婚に漕ぎつけたのだった。四百字詰め換算で一一〇枚を超える作品とはいえ、鈴江が息子の俊樹を難産で産み落とす場面や、舌癌で亡くなる二度目の夫、正也の話など、たくさんのテーマがいささかまぎるしく展開するし、文章も粗い。しかし、その分、作者が作品にこめた熱量を感じ取ることができる。

『あるかいど』第68号では、高畠寛「潮夏（しおなつ）」が実験的な作風で光っている。北海道の祖父のもとで中学生のときにはじめて出会った紀子（のりこ）との関係を「私」が振り返った短篇だが、相当手のこんだ構成が取られているのだ。

冒頭はこうはじまる。「私が初めて紀子を見たのは八年前である」。そして、その中学二年での出会いがしばらく綴られたあと、一行空きで「——以上までの部分は、中学二年の夏休みの記憶をたよりに、一九五九年の同じ八月——つまり私の大学四年の夏休みに書いている」という文章が置かれている。さらに、上記の文章を「私」が書いているのは、大学を終え、就職して四年の時点とされている。そして、いちばん美しい高校三年の海辺での

紀子との場面は、当時の日記や断章をもとにしているとされている。

このように、いくつもの時間と断片によって再構成された、場合によっては捏造された、記憶の物語。しかし、そこに垣間見られる「私」と紀子の姿には、とても哀切なものがある。

『架橋』第34号掲載の、磯貝治良「道★連（づ）れ」は、自転車での旅を続ける若い逃走犯と老人の不思議な物語。

三十歳の「ぼく」は「箱」（刑務所）を抜け出して、駅前で手に入れた自転車がまたがって旅を続ける。旅に出て九日目に、「赤いTシャツ」を着た「ウミモリさん」と出会う。ウミモリさんは四、五十歳代に見えるが実年齢は八十一歳だという。彼も自転車の旅を続けているようだ。「ぼく」はウミモリさんに先導される形で自転車の旅を続けてゆく。

ウミモリさんに出会う前、「ぼく」は「只今、日本一周中」と書いた紙を自転車に貼っていたが、市役所の観光課ではそれをラミネート加工したもので渡され、道の駅ではそのラミネート紙とともに「駅長さん」と笑顔で写真撮影していた…。

ここまで来ると、読者にはこれが現実の事柄に基づくものであることが明瞭となるだろう。事実、作品の後半では、そのことが新聞記事の引用とともに示されている。現実では脱走者の「ぼく」は四十九日後に身柄を確保

されている。しかし、この作品では、ウミモリさんの妹夫婦の経営する民宿に住み込む形で新たな暮らしをはじめることになっている。その民宿はいわば隠れ家のようなところ、日本史研究者、網野善彦が「無縁・公界・楽土」と定式化したアジールである。旅のルートの克明な記述とともに、アジールへの希求に、作者の強い思いを感じさせられた。

今回届いた『V I K I N G』では、第833号掲載の宇江敏勝「乞食」、第834号掲載の同じく宇江敏勝「山神の夜太鼓」が相変わらず印象深い。

『乞食』では、「わたし」が小学校五年のときに出会った、物もらいをして暮らしていた「オチアイ」と呼ばれる「乞食」の姿が描かれる。戦後間もない時代で、村びとの暮らしも苦しいなか、村外れの岩窟で起居している「オチアイ」にみんなは少しづつ施しをしていくと、逆に「オチアイ」への関心が薄れてゆく。その時代相の変遷が残酷だ。

一方、「山神の夜太鼓」では、二十二歳の卓治を主人公にして、炭焼き職人の姿が生き生きと描かれている。実際、私がかれまで読んだなかで、炭焼きの仕事の手順がいちばん克明に記されている。これだけ炭焼き仕事について書けるのは、作者以外には存在しないだろうということはいえない。